

豊後高田の 庚申塔



所在地 豊後高田市大字真中
市指定有形民俗文化財 真木大堂庚申塔 一基

庚申塔

はじめに ～江戸時代に流行した民間信仰の証～

■^{こうしん}庚申とは？

庚申とは^{え と}干支（=^{じっかんじゅうにし}十干十二支）の組み合わせの1つで、訓読みでは「かのえさる」と読みます。^{じっかん}十干は“^{こう おつ へい てい}甲・乙・丙・丁…”といった日付の符号です。1ヶ月を上・中・下旬の3つに分けて、1旬（=10日）の毎日に割り振ります。また、^{じゅうにし}十二支は“^ね子・^{うし とら う}丑・寅・卯…”といった12ヶ月の順を表す呼び名でしたが、次第に時刻や方位の表現にも使用されました。十干と十二支の組み合わせは60通り（=^{ろくじっかんし}六十干支）となり、これを^{こよみ}暦に当てはめると、60日に1度「庚申の日」が訪れ、60年に1度「庚申の年」が巡ってきます。六十干支が一巡すると「^{かんれき}還暦」となります。

1 甲子 コウシ きのえね	2 乙丑 イツチュウ きのとうし	3 丙寅 ヘイイン ひのえとら	4 丁卯 テイボウ ひのとう	5 戊辰 ボシン つちのえとら	6 己巳 キシ つちのとみ	7 庚午 コウゴ かのえうま	8 辛未 シンビ かのとひつじ	9 壬申 ジンシン みずのえさる	10 癸酉 キユウ みずのととり
11 甲戌 コウジュツ きのえいぬ	12 乙亥 イツガイ きのとい	13 丙子 ヘイシ ひのえね	14 丁丑 テイチュウ ひのとうし	15 戊寅 ボイン つちのえとら	16 己卯 キボウ つちのとう	17 庚辰 コウシン かのえとら	18 辛巳 シンシ かのとみ	19 壬午 ジンゴ みずのえうま	20 癸未 キビ みずのとひつじ
21 甲申 コウシン きのえさる	22 乙酉 イツユウ きのととり	23 丙戌 ヘイジュツ ひのえいぬ	24 丁亥 テイガイ ひのとい	25 戊子 ボシ つちのえね	26 己丑 キチュウ つちのとうし	27 庚寅 コウイン かのえとら	28 辛卯 シンボウ かのとう	29 壬辰 ジンシン みずのえとら	30 癸巳 キシ みずのとみ
31 甲午 コウゴ きのえうま	32 乙未 イツビ きのとひつじ	33 丙申 ヘイシン ひのえさる	34 丁酉 テイユウ ひのととり	35 戊戌 ボジュツ つちのえいぬ	36 己亥 キガイ つちのとい	37 庚子 コウシ かのえね	38 辛丑 シンチュウ かのとうし	39 壬寅 ジンイン みずのえとら	40 癸卯 キボウ みずのとう
41 甲辰 コウシン きのえとら	42 乙巳 イツシ きのとみ	43 丙午 ヘイゴ ひのえうま	44 丁未 テイビ ひのとひつじ	45 戊申 ボシン つちのえさる	46 己酉 キユウ つちのととり	47 庚戌 コウジュツ かのえいぬ	48 辛亥 シンガイ かのとい	49 壬子 ジンシ みずのえね	50 癸丑 キチュウ みずのとうし
51 甲寅 コウイン きのえとら	52 乙卯 イツボウ きのとう	53 丙辰 ヘイシン ひのえとら	54 丁巳 テイシ ひのとみ	55 戊午 ボゴ つちのえうま	56 己未 キビ つちのとひつじ	57 庚申 コウシン かのえさる	58 辛酉 シンユウ かのととり	59 壬戌 ジンジュツ みずのえいぬ	60 癸亥 キガイ みずのとい

六十干支表

■十干と陰陽五行説

陰陽五行説とは、自然界のあらゆるものを「陽（＝兄）」と「陰（＝弟）」に分けて、万物を成り立たせている5つの要素「木・火・土・金・水」と結合して、自然や現象の働きを説明する古代中国で生まれた世界観です。陰陽五行説は十干と結びつき、「木兄＝甲（きのえ）」、「木弟＝乙（きのと）」、「火兄＝丙（ひのえ）」というように、呼び方を当てはめるようになったとされています。

■庚申信仰とは？

庚申信仰は中国の道教の教えに由来するもので、日本には平安時代に伝わり、その後は仏教・密教・神道などと結びついて庶民の間に広まった民間信仰です。

道教が説く「三尸説」という考えによれば、人間の頭と腹と足には三尸の虫がいて、いつもその人の悪事を監視しているといわれます。60日に1度巡ってくる庚申の日に眠ると、寝ている間に体内から抜け出した三尸の虫は、天にのぼって天帝（閻魔大王とも）にその人の日頃の行いや悪事を告げ口することで、罪状によっては寿命を縮められたり、死後に地獄・餓鬼・畜生の「三悪道」に落とされたりすると考えられていました。

この災いから逃れるためには、三尸の虫が天帝に告げ口できないように、一晩中起きていれば良いということになります。そこで、庚申の日は身を慎んで、眠らずに徹夜して過ごすという風習が行われていました。1人で夜明かしすることは難しいことから、酒や食べ物を持ち寄って、飲食や歓談しながら集団で夜を過ごす「庚申待」の行事が行われるようになりました。

■三尸の虫

唐の時代の中国の書物には、三尸の虫が右図のように描かれています。大きさは2寸（約6cm）ばかりだそうです。右側に描かれているのが「上尸」で、人間の頭の中にいるとされています。道教由来の考え方なので、道服を着た姿です。真ん中の獣の姿で描かれているのが「中尸」で、人間の腹の中にいるとされています。左側にいて、人の足に牛の頭が乗った姿で描かれているのが「下尸」です。人間の足の中に潜っているとされています。



三尸の虫(イラスト)

[画像提供: 足立区生涯学習支援室地域文化課]

■庚申塔はなぜつくられた？

庚申待の集まりを一定期間（多くの場合、3年18回）続けた記念として建立されたものが「庚申塔」で、現在でも全国各地で多く見ることができます。

庚申待の儀式は平安時代の貴族社会で始まり、鎌倉～室町時代の武家社会を経て、江戸時代には全国の農村などで大流行するほど庶民の間に浸透しました。各地で庚申講が組織され、これにともなって庚申塔も数多く造立されました。

庚申塔の形や彫られる図像、文字などは多種多様です。これは、庚申信仰が仏教や神道などと習合して広がった民間信仰であることを反映しています。

仏教では青面金剛しょうめんこんごうや帝釈天たいしゃくてんなどが本尊として庚申塔に彫られる一方、神道では猿田彦神さるたひこが彫られました。これは庚申の「申」が、猿田彦の「猿」と結びついたものと考えられています。同じような理由で、庚申塔には三猿（見ざる・聞かざる・言わざる）の姿が彫られることも多く見られます。また、猿田彦神は天孫降臨神話の中で道案内をしたことから、進むべき道を照らす「道開きの神」として祀られ、道祖神と同一視されました。道祖神と習合した庚申塔は、集落の境や田畑を見下ろす高台などに、五穀豊穡ごこくほうじょう、無病息災あくえきたいさん、悪疫退散、子孫繁栄などを願って祀られたと考えられています。



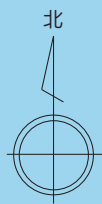
呉崎・産土神社境内に所在する
「猿田彦大神」文字庚申塔(未指定)
弘化四年(1847)の造立

■ぶんどたかだの庚申塔

国東半島の庚申塔について造詣ぞうけいが深い小林幸弘氏の研究によると、国東半島は全国的に見ても庚申塔の分布密度が高い地域の1つであり、半島内には約1200基もの庚申塔が所在しているとされています。この内、豊後高田市内には約260基の庚申塔が確認されています。市内において庚申塔の造立が行われるようになるのは、江戸時代前期（寛永年間：1624～1644）からです。とりわけ、江戸時代中期（1681～1780）は造立の最盛期であり、青面金剛像の図像を中心に数多くの庚申塔が残されています。江戸時代後期（1781～1867）に入ると次第に造立数が少なくなり、「庚申塔」もしくは「庚申」と文字のみ彫り付ける文字庚申塔が増加する傾向にあります。

今回、市内に所在する主な庚申塔を取り上げて解説した小冊子『豊後高田の庚申塔～ぶんどたかだ文化財ライブラリー Vol.7～』を作成しました。本冊子が文化財鑑賞の手引きとして、また、豊後高田市の歴史文化を知る一助としてご活用頂ければ幸いです。

豊後高田市教育委員会



凡例

県指定文化財 ●

市指定文化財 ●

未指定文化財 ●

◆市内には約260基の庚申塔が確認されていますが、本冊子では特徴的で比較の見学しやすいと思われる庚申塔を取り上げてご紹介しています。



豊後高田市内の主な庚申塔マップ

真木大堂に隣接する古代文化公園で野外展示されている庚申塔です。石材は角閃石安山岩で、総高は166cm。基礎・塔身・笠の3つの部材で成り立っており、笠は寄棟造の形で作られています。塔身の両側面には「享保十三戊申天」「八月吉祥日」との刻銘がみられ、庚申信仰が盛んであった江戸時代中期、1728年（享保13）の造立であることが分かります。塔身の上部には日輪・月輪を、中央には一面六臂の青面金剛像と二童子像を蓮華座の上に配し、その下には三猿、二鶏、四夜叉の彫刻が並んでいます。また、塔身の最下部には庚申講の構成員だった人たち（＝講中）の名前が刻まれています。

大型かつ丁寧な造りの彫刻表現などから、国東半島における庚申塔の「お手本」のような1基といえるでしょう。豊後高田市の有形民俗文化財に指定されています。

■庚申塔に見られる彫刻

◎青面金剛像

青面金剛明王とも呼ばれますが、インド由来の仏教尊像ではなく、中国の道教思想に由来し、日本の庚申信仰の中で独自に発展した尊像です。一般的な像容は、足元に邪鬼を踏みつけ、六臂で法輪・弓・矢・錫杖などを持つ憤怒相で表現されます。両脇に二童子や四夜叉（四鬼神）を伴う場合もあります。

◎日輪・月輪

庚申塔が徹夜をして朝を迎えることから。

◎二鶏

庚申塔が「申」から「酉」の日にかけて行われることや、鶏が朝を告げる声で庚申の日が終わりになることに由来するそうです。

◎三猿

庚申の「申」から。また、三猿を「三尸の虫」に対応させて、目や耳や口をふさいで、悪事を天帝に告げさせないとする願いを表現したものとも。



真木大堂庚申塔

■古代文化公園にある庚申塔

古代文化公園には、前頁で紹介した「真木大堂庚申塔」の他にも、庚申塔を見ることができます。

写真右手の庚申塔は、塔身上部から日輪・月輪、一面六臂の青面金剛像、二鶏、三猿、四鬼神を刻んでいます。側面には「享保二丁酉天 十一月初十日」の刻銘があり、1717年（享保2）の造立であることが分かります。

また、写真左手前の庚申塔は、「奉待青面金剛童子」と刻まれた文字庚申塔です。側面には「正徳二壬辰天」「二月上之七日」と刻まれており、江戸時代中期の1712年（正徳2）に造立されました。



古代文化公園内に所在する庚申塔

あんようじもじこうしんとう 安養寺文字庚申塔

・文化財指定
[市指定]

・位置情報
【33°30'49.6"N 131°31'08.4"E】

たしふ まなか
田染真中の安養寺という寺院の境内に所在します。総高は200cmで先の尖った薄い板状の自然石に文字を彫りこんだ庚申塔です。上部に阿弥陀三尊を表す梵字（種字）があり、中央には「奉建立石塔一字事為庚申御供養」の一文があり、その左右には「息災延命、子孫繁盛、家内安全、武運長久、諸願成就」といった願文が並んでいます。

江戸時代前期の1625年（寛永2）に造立されたもので、豊後高田市を含む国東半島においては、後述する「熊野庚申塔」に次いで造立年代が古い庚申塔とみられています。豊後高田市の有形民俗文化財に指定されています。



安養寺文字庚申塔

くま の はしもと こうしんとう
熊野(橋本)庚申塔

・文化財指定
[未指定]

・位置情報
【33°28'53.8"N 131°31'11.5"E】

県道655号線（新城山香線）から側道に入り、熊野磨崖仏や熊野集落に向かう旧道の入口に2基並んで立っています。

写真右側の庚申塔は総高100cm。表面が風化して判読が困難ですが、「奉住厳庚申霊塔善宝安置事」などの銘が刻まれた文字庚申塔です。造立年は江戸時代前期の1624年（寛永元）で、市内はもとより国東半島でも最古の庚申塔とされています。

写真左側の庚申塔は総高160cm。中央に「奉念御庚申一字如意祈所」や、法華経の一節（願わくは此の功德をもって〜）が刻まれているほか、阿弥陀三尊などの種字が彫られている文字庚申塔です。江戸時代前期の1635年（寛永12）の造立です。



熊野(橋本)庚申塔

■種字とは？

仏様を象徴する一文字を梵字（古代インドのサンスクリット文字が起源とされる）で表したものです。この一文字からすべての功德が生じると考えられており、植物の種子に例えて「種子」ないしは「種字」と呼びます。

庚申塔をはじめ、板碑や石塔などの石造物に種字が刻まれていたり、お寺のお守りや曼荼羅などに種字が書かれていたりすることもあります。



熊野(橋本)庚申塔の碑面に刻まれた種字

まえだ こうしんとう
前田の庚申塔

・文化財指定
[市指定]

・位置情報
【33°35'14.6"N 131°31'02.1"E】

前田の庚申塔は、城前^{じょうのまえ}にある清台寺の門前から真玉川に向かってしばらく進むと、川沿いに広がる水田^{あぜみち}の畦道^{かたわ}に立っています。総高は190cmで、傍らに一石五輪塔と思われる石造物^そが添えられています。

自然石を板碑型に加工して、碑面に文字を刻んだ文字庚申塔です。頂部に日輪・月輪のような線刻の下に銘文がありますが、経年による磨滅^{まめつ}で文字の判読が難しくなっています。江戸時代前期の承応年間（1652～1654）の作とされており、真玉地域では最古の庚申塔と考えられます。



前田の庚申塔

うてら こうしんとう
有寺庚申塔

・文化財指定
[市指定]

・位置情報
【33°36'11.7"N 131°31'47.3"E】

真玉川が流れる大岩屋の谷の奥、有寺^{ろぼう}の集落の路傍にある一風変わった庚申塔です。板状の自然石3枚を立て合わせ、その上部には唐破風型の笠と宝珠をのせた石室^{からはふ}（総高177cm）の中に、丸彫りの青面金剛像をお祀りしています。

縮れて肩の辺りまで垂れた頭髪と、面長でエキゾチックな顔立ちに、右手には三叉戟^{さんさげき}を持つ（左手首は折損）特異な造形表現が際立っています。足元には二猿と二鶏を配し、基礎には造立年（享保4年（1719））と講中の名が刻まれています。

有寺集落では、戦後しばらくまで地区の人々によって庚申講のお祭りが続けられていました。



有寺庚申塔

こ だ わ ら た て み ち こ う し ん と う
小田原立道の庚申塔

・文化財指定
 [未指定]

・位置情報
 【33°32'34.4"N 131°29'21.6"E】

小田原に所在する^{とう みどう}塔ノ御堂板碑（県指定）・
 塔ノ御堂国東塔（市指定）のある場所からほど
 近くの路傍に立つ庚申塔です。総高130cmで、
 ずんぐりとした重量感のある自然石を加工して、
 その中に青面金剛他の諸像を彫り込んでいます。
 主尊の青面金剛像は、盛大に逆立つ^{えんぱつ}炎髪^{えんぱつ}の表
 現が特徴的で、身体から大きくのびた腕には弓
 矢、宝珠、錫杖をそれぞれ手にしています。左
 右に二童子と、青面金剛の足元には、三猿が
 逆三角形に配されています。二童子の下には左
 右に二鶏が収まっています。無銘のため造立年
 は不明ですが、江戸時代中期の作と思われます。



小田原立道の庚申塔

み わ か わ ら こ う し ん と う
美和川原の庚申塔

・文化財指定
 [未指定]

・位置情報
 【33°33'07.2"N 131°27'21.8"E】

桂川沿いにある美和の桂神社の境内から、
 通りを隔てた路傍に立っています。総高は180
 cm。塔身の幅が下から上に向かって^{ばちがた}撥形^{ばちがた}に広
 がっており、不安定な印象を与えます。国東半
 島における庚申塔の青面金剛像は、四臂また
 は六臂が一般的ですが、この庚申塔に刻まれた
 青面金剛像は一面八臂の姿で表され、足元の
 邪鬼を踏みつけています。その下には三猿と向
 かい合う二鶏が配されています。

塔身の脇に刻まれた銘文から、江戸時代中期
 の1724年（享保9）に造立されたことが分か
 ります。元は別の場所に立っていたものを、1993
 年（平成5）に現在の場所に移してきたそうです。



美和川原の庚申塔

ふ き じ こうしんとう
富貴寺庚申塔

・文化財指定
[未指定]

・位置情報
【33°32'14.8"N 131°31'42.8"E】

国宝・富貴寺大堂で知られる、富貴寺の参道脇にひっそりと立っている庚申塔です。総高は160cm、塔身の両側面には「享保十五庚戌天十月廿五日講中」の銘が刻まれています。笠の上に宝珠をのせていますが別物のようです。一面四臂の堂々とした青面金剛像を中央に配し、その下には猿と鶏が向かい合っています。上部には瑞雲ずいうんのような複雑な線刻がみられます。



富貴寺庚申塔



造立年(享保十五年(1730))の銘

やまじんじゃ ふきひなたびら こうしんとう
山神社(落陽平)庚申塔

・文化財指定
[未指定]

・位置情報
【33°32'27.1"N 131°32'32.3"E】

富貴寺から県道655号線を1.5kmほど上った陽平集落に所在する山神社の参道脇にある庚申塔です。総高は120cmほどで、自然石を削平した碑面に日輪・月輪を表した線刻と、大日如来たいざうかい(胎蔵界)を示す種字「アーク」がみられます。中央には図像ではなく、「青面金剛尊塔」と刻まれた文字庚申塔です。下部には造立者の代表と思われる「柏木文次良」「永松平蔵」の名前が残されています。

造立年は江戸時代中期後半の1775年(安永4)で、この頃から徐々に図像の庚申塔の造立が少なくなり、簡略化した文字庚申塔が増えていきます。



山神社(落陽平)庚申塔

てんねんじ こうしんとう
天念寺庚申塔

・文化財指定
[未指定]

・位置情報
【33°34'42.7"N 131°32'25.8"E】

毎年、旧暦の1月7日に催される「^{もよお}修正鬼会^{しゅじょうおにえ}」の行事で知られる天念寺の講堂脇に立つ庚申塔です。総高は150cmです。彫刻面の状態は比較的良好で、青面金剛像の険しそうな表情や、細かい線で表現した炎髪、持物の数々などが見て取れます。また、左手にはショケラを持っているのが特徴的です。

下段には鳥帽子を被って御幣を担いだ猿がユーモラスに表現され、猿と向かい合う形で尾羽を広げた鶏が彫られています。江戸時代中期の1742年（寛保2）の造立です。



天念寺庚申塔に刻まれた猿



天念寺庚申塔

おかわち こうしんとう
小河内庚申塔

・文化財指定
[市指定]

・位置情報
【33°35'45.6"N 131°33'23.4"E】

黒土の谷の奥、小河内集落にある山神社・岩仲寺付近に2基並んで立つ庚申塔です。写真右側の庚申塔は総高160cmで、一面六臂の青面金剛像を中心に日・月輪、瑞雲、二鶏、三猿、四夜叉を行儀よく配列しています。銘文より1715年（正徳5）の造立です。左側の庚申塔は総高130cmで、青面金剛は邪鬼を踏みつけ厳しい表情を見せており、左手にはショケラを手にしています。



左手にショケラを持つ青面金剛像



2基並んで立つ小河内庚申塔

■青面金剛とショケラ

庚申塔に彫られた青面金剛像の図像には、しばしば左手で頭髪をつかんで提げている半裸女人像を見かけます。これは「ショケラ」や「ショウケラ」などと呼ばれており、「精螻蛄」とも表記されます。

「ショケラ」は庚申信仰における「三尸の虫」(2頁参照)を指していると解釈されており、三尸の虫を擬人化した姿であるとか、青面金剛が三尸の虫を征伐している姿を表現しているとも考えられています。

しかし、「ショケラ」を半裸の女人の姿で表現する理由や、その起源などは不明な点が多く、良く分かっていません。



左手にショケラを持つ青面金剛(天念寺庚申塔)

ながいわや いち はらい こうしんとう 長岩屋(一ノ払)庚申塔

・文化財指定
[未指定]

・位置情報
【33°35'04.2"N 131°33'43.3"E】

長岩屋の谷の最奥部、県道548号線が黒土方面に至る道と分かれる三叉路^{さんさろ}の傍らに立っています。一面六臂の青面金剛像に踏みつけられた邪鬼の表情が特徴的で、愛らしい印象を受けます。塔身脇の銘文から江戸時代後期前半の1784年(天明4)に造立されました。



正面を向いた邪鬼の表情が印象的



長岩屋(一ノ払)庚申塔

尾鼻庚申塔

・文化財指定
[未指定]・位置情報
【33°37'18.7"N 131°32'44.2"E】

中山仙境の前田登山口にある庚申塔です。総高は139cm。塔身の頂部には日輪・月輪と思われる線刻が認められます。その下を一段深く彫り込んで仏龕^{ぶつがん}を表現し、中には一面六臂の青面金剛像と、足元に二猿・二鶏を配しています。

経年による磨滅で青面金剛像の表情などは判別しづらいですが、右の一手が大きな蛇を掴^{つか}んでいる様子はよく分かります。江戸時代中期の1711年（正徳元）の造立です。



右手で掴んでいる蛇



尾鼻庚申塔

施恩寺庚申塔

・文化財指定
[未指定]・位置情報
【33°38'33.5"N 131°31'55.0"E】

上香々地にある施恩寺の境内を抜けた裏山にひっそりと立っています。総高88cmの板碑型で、全体的に保存状態の良い庚申塔です。

大きく張り出した庇^{ひさし}の下には、日輪・月輪とたなびく瑞雲を施しており、一部には彩色も残っています。中央には一面四臂の青面金剛像と、左右には二童子を従え、その下には三猿と二鶏を配しています。青面金剛像の右手には蛇と杖、左手には独鈷^{とっこ}と法輪を持っています。下段には造立に関わった講中と思われる人々の名前が墨入で刻まれています。江戸時代中期の1733年（享保18）に造立されました。



施恩寺庚申塔

どうぞの こうしんとう
道園庚申塔

・文化財指定
[県指定]

・位置情報
【33°37'02.1"N 131°32'51.3"E】

かつて、庚申講の祭祀^{さいし}は集落ごとに各地で盛んに行われていましたが、戦後の社会情勢の変化などで次第に姿を消していきました。一方、香々地^{えびす}の夷にある道園集落では、「まちあげ（待上）」と呼ばれるお祭りが現在も続けられています。地元には1753年（宝暦3）から待上講を行ってきた代々の記録が残っており、道園集落における庚申塔への信仰が約270年間にわたって継承されていることが分かっています。

また、集落にある庚申塔「猿田彦大神像庚申塔」（1753年（宝暦3）造立）と、折損した「青面金剛像庚申塔」（1729年（享保14））は、仏式の青面金剛像から神式の猿田彦大神像^{へんせん}への庶民信仰の変遷を物語る貴重な資料と評価され、前述した記録類と合わせて2021年（令和3）に大分県指定有形民俗文化財に指定されました。



道園庚申塔（猿田彦大神像庚申塔）



祭祀の様子。庚申塔に餅などをお供えして、祝詞をあげます。



道園庚申塔（青面金剛像庚申塔）

■庚申塔鑑賞の注意事項

- 庚申塔は貴重な文化財ですから、大切にしましょう。文化財保護の観点から、庚申塔に直接触れるような行為は極力控えましょう。
 - 庚申塔は地域の方々の信仰の対象となっているものもあります。鑑賞の際にはマナーを守って行動しましょう。拓本や実測など詳細な調査を希望する場合は、各管理者の意向に従ってください。
 - 私有地や山中などに立地する庚申塔も数多くありますので、立入には十分気を付けて下さい。
- ※本冊子では、各庚申塔の所在地の【位置情報】を表記しています。場所検索の参考・目安にご利用ください。但し、必ずしも所在地の正確性を保証するものではありません。

■「ぶんごたかだ文化財ライブラリー」シリーズ



- Vol.1 『豊後高田の城跡』 平成30年度発行
- Vol.2 『豊後高田の磨崖仏』 令和元年度発行
- Vol.3 『豊後高田の古墳』 令和2年度発行
- Vol.4 『豊後高田の仏像十選』 令和3年度発行
- Vol.5 『豊後高田の国東塔』 令和4年度発行
- Vol.6 『「昭和の町」の建物探訪』 令和5年度発行



※豊後高田市ホームページ内でデータ公開中！
※大分県電子書籍ポータルサイト《oita ebooks (オータイイーブックス)》でも閲覧可能！

詳しくは



【参考文献】 香々地町誌刊行会（1979）『香々地町誌』／香々地町教育委員会・香々地町文化財調査委員会（1994）『香々地町の文化財』／香々地町教育委員会（2002）『香々地町の庚申塔』／小泊立矢（1971）『香々地、国見町の庚申塔』『大分県地方史』第61号／小林幸弘（2017）『国東半島の庚申塔』大分合同エデュカル／小林幸弘（2021）『国東半島の庚申塔総覧』／酒井富藏（1972）『国東半島の石造美術』／坂詰秀一監修（2011）『考古調査ハンドブック5 石造文化財への招待』ニューサイエンス社／豊後高田市（1998）『豊後高田市史 通史編』／豊後高田市（2013）『豊後高田市の文化財』／真玉町誌刊行会（1978）『真玉町誌』／真玉町教育委員会・真玉町文化財調査委員会（1991）『真玉の文化財』／国東半島の庚申塔 <http://5884koshinto.my.coocan.jp/index.html>

ぶんごたかだ 文化財ライブラリー vol.7

『豊後高田の庚申塔』

発 行：豊後高田市教育委員会文化財室
TEL：0978-53-5112 / FAX：0978-53-4731
E-mail：bunkazai@city.bungotakada.lg.jp
発行日：令和7年3月31日発行
印 刷：有限会社 宗印刷所
表 紙：真木大堂庚申塔